

新刊紹介

大塚久雄著

近代資本主義の系譜

北村敬直

去る一ヶ年の歴史學界をかえりみると、大塚教授の論文集「近代資本主義の系譜」は、その最も耀かしい收穫であると共に、また最も問題にされた業績であると言ふことが出来よう。いな本書の出版を契機として、さらにひろく大塚史學一般が、昨年の歴史學界の中心課題となつた感がある。このような問題の書を全面的に紹介することは、とうてい私のなし得るところではない。私は本書の中で問題となるたゞ一つの點、すなはち大塚教授の見解の變化といふことだけを取り上げて紹介しようと思ふ。

本書は大塚氏の十年にわたつて發表せられた十一篇の論文を收録したものであるが、研究の進むにつれて氏がその見解を變へられたことについては、本書の序文において、氏みづからすでに指摘されるところである。おほげさに言へば、本書の「諸論文の間に見られ

る見解の相違のうちに、著者が此の十年餘の間に辿り來つた思索と理論的立場の變遷の跡をば呈示する」といふことに、本書の一つの意義をさへ認めてゐられる様にも思はれる。それでは具體的に如何なる點に見解の變化が見られるか。これについてもすでに氏みづから、本書の序文において二つの點を擧げてゐられる。まづ第一に、氏は古い論文に見られる「初期資本」なる概念を後になつて完全に放棄され、代つて「中産の生産者層」「農村工業」などの諸概念を史實分析の基準として構成されたことである。氏は最初「前期的資本と産業資本とを範疇的に峻別し乍らも、なほ、産業資本の歴史的形式に際し『前期的資本』がそれ自體として何らか主體的意義を有つた」と考へられ、こゝに「初期資本」といふ概念を持つて來られた。「併し乍ら、後に至つて此の見解は捨てられた。産業資本の自生的・典型的な歴史的形成を推進した社會的主體は、商人II高利貸ではなくして勤勞民衆（特殊歴史的には「中産の生産者層」）自體であり、従つて産業資本生誕の社會的系譜はもつばら後者の裡に見出さるべきであるとの見解」に後に至つて到達されたのである。

次に、以上の點と關聯しつゝ、新しい見解では「生産力」の問題が「はつきりと前面に押し出されて來」たことである。それは氏が「右のやうな見解の變遷とともに、近代資本主義發達史の基礎視點は、『營利』の擴充や進展過程の問題などではなく、『生産力』の發達の問題として取上げねばならぬと云ふ事ははつきりと意識」される様になつたからであると云ふ。そこで後にはこういつた立場から「生産力」と關聯して歴史の推進的主體性の問題が必然的に取上

げられることとなり、ついで「エトス」とか「人間類型」といった精神史的な問題が、ウエーバー的な視點から問題の視野の中に入つて來ることとなつたのである。

この様に見てみると、氏の見解の變化といふ問題を取上げるだけでさへ、その關聯するところは極めて廣く且つ複雑である。たゞ幸ひに第二の點については、林健太郎氏はじめすぐれた批判がすでに提起されてゐるので、私はこゝに第一の點のみを限つて、氏の見解の變化を紹介してみることにする。

二

上に述べた様に、大塚氏はその古い見解においては、前期的資本と産業資本とを範疇的に嚴密に區別されながらも、しかも前期的資本が「産業資本の歴史的形成」の際に、「それ自體として何らか主體的意義を有つた」と考へられ、こゝに「初期資本」なる概念を提出された。本書の第一、第二論文はちこの様な「初期資本」の一構成要素としての前期的資本の運動法則の解明にあてられてゐる。第一論文「所謂前期的資本なる範疇に就いて」において、氏はまづ、前期的資本の存在が單純なる商品及び貨幣流通のみを前提として可能なること、そしてその利潤はかゝる單純なる商品流通機構の擴大——國內市場の形成——の過程を通して導き出されるものであること、その利潤の源泉は、従つて封建社會における封建的餘剰生産物であることを明かにされた後、かゝる前期的資本の循環運動が、本質的に矛盾をばらむものであること、すなはち、前期的資本はその

運動を通して封建社會を解體せしめて行くが、しかも封建社會の解體は同時にその利潤の源泉の消滅に外ならないことを指摘される。そこで前期的資本はその運動の内包する矛盾の故に、これに對する反作用として、反動的專制的に舊來の地盤を維持するか（獨占）、それともいわゆる二つの途を通して範疇的轉化をとげるか（産業資本への推轉）のいづれかを選ばねばならないが、いづれにしても前期的資本は封建社會の機構をしめつけ、崩壞せしむると同時に、その崩壞過程そのものに寄生する「すぐれて過渡的」な性質のものである。この様な推轉過程にある過渡的な時代においては——獨占の場合については、第二論文——産業資本にとつても、その未熟性の故に、とくに「販路」の問題の故に、前期的資本がその存在の前提とならざるを得ない。従つてこの時代においては、前期的資本と産業資本とは、しばらく經過的に結び付いた「初期資本」として現れる。もちろん兩者は本質的には互ひに反撥する性質のものではあるが、しかも兩者は經過的に一個の「共生體」として現れざるを得ないのである。かかる矛盾の統一體としての「共生體」を大塚氏は「初期資本」と名付け、そして「初期資本」の原始蓄積の場合における「前進的推進力」を、またその前進的推進力にも拘らず究極においてはそれは保守的性質を持つことを、指摘されるのである。第二論文「初期資本主義における所謂「獨占」に就いて」は、第一論文のいはば補足をなすものであつて、かかる初期資本主義時代において、「初期資本」の前期的資本機能が反動的に反作用する場合、それが「獨占」として現れることを理論的に説明し、しかも「獨占」

が反動的なものであつても、一應原始蓄積において進歩的な役割をも果たすといふ、矛盾した性質を併せて指摘されたのである。

この様に、大塚氏はその古い見解においては前期的資本を問題とすることによつて、初期資本主義時代にそれが産業資本との共生體として現れ、その内包する矛盾が矛盾として運動しつゝ近代資本主義を推進的に形成して行く過程を明快な理論をもつて解明された。

氏の言葉をかりて言へば、「商業資本（前期的資本）の支配的であること、マニユファクチュア（産業資本）の支配的である事とは」決して「Entwedererではない。反對にマニユファクチュアの支配的であることは、常に商業資本の支配的であることを意味する」のであつて、かゝる意味において前期的資本は、産業資本の形成に際して推進的役割を果たしたと考へられたわけである。しかるに氏の新しい見解を示すところの第三、第四論文においては、この古い見解はすて去られた。第三論文「近代資本主義發達史に於ける商業的地位」において、氏は近代産業資本の由つて來る歴史の淵源は商業資本のうちにあるか、それとも封建社會の崩壞過程において現れた中産的生産者層にあるか、言ひかへれば、産業資本の主體的推進力は商人かそれとも中産的生産者か、と問題を提起され、結論として商人にあらずして中産的生産者層こそ産業資本を主體的に推進せしめた社會層であることを史實に照して證明された。第四論文「問屋制度の近代的形態」は第三論文の補足をなすものであつて、十八世紀イギリスにおいて、すでに産業資本が基本的に指導力を驅つたにも拘らず、一方商業資本と問屋制度もまたますます繁榮するといふ、

一見第三論文の結論と矛盾するごとき事實あることを取上げて、この時代の商業資本と問屋制度は、實はそれ以前の前期的資本とは質的に異つた、むしろ近代的性質のものであることを説明し、もつて第三論文の結論を一層補強されたのである。

三

以上においてわかる様に、大塚氏は新しい見解において古い見解に示された「初期資本」なる概念をすて、産業資本の主體的推進力を「中産的生産者層」に求められたのであるが、このことは大塚氏における單なる見解の變化、すなはち「初期資本」から「中産的生産者層」といふ史實分析基準としての概念の變化としてのみ見出すを許さないものがある様に思ふのである。といふのは、本書を注意してよんでみると、次のことがわかるからである。なるほど氏は新しい見解において「初期資本」なる概念をすてられたのであるが、しかし初期資本主義時代における前期的資本の推進的役割については決してこれを全面的に否定されたわけではないのであつて、このことを一應認められた上で、それを前提として論をすゝめておられるのである。このことは新しい論文においては、そのはじめにくりかへし斷つておられるところである。にも拘らず商業資本か中産的生産者層かといふ Entwederer があらはに問題として提起され、そしてその二者擇一が結論とされるのである。

同様のことはまた氏の古い見解についても言へるのであつて、産業資本を自生的に推進せしめた主體が商業資本（前期的資本）では

なくして非資本家的中産者であつたといふことは、古い論文においてもはつきりと述べられてゐる。にも拘らず氏の古い見解においては、このことは問題の主題とはならず、かへつて商業資本と産業資本との矛盾（共生と對立）、その矛盾の統一體としての初期資本の發展そのものが問題とされてゐるのである。

こう見てくると、氏の見解の變化といふことは、單に初期資本なる概念の取捨といふだけのものではなく、もつと根本的なもの、すなはち氏によつて立たれる「立場」の決定的な轉換ではないであらうか。言ひかへれば問題を提起する、その提起の仕方「視角」の「轉換」を示すものではないだらうか。古い見解においては、問題は歴史事象における内在的矛盾及び矛盾の發展如何として提起せられてゐる。従つてここでは、歴史事象は單なる *Entwederoder* をもつてではなく、それをも含むより廣汎な矛盾の統一體として把握せられてゐる。しかるに新しい見解においては、問題は必ず *Entwederoder* をもつて提起せられ、従つて結論はまた必ず二者擇一であつて、ここでは歴史事象に内在する矛盾を矛盾として容れる何らの餘地もない。言ひかへれば、新しい立場では、ある特定の歴史事象を取上げてその内在的矛盾の運動を探索することではなくして、それを形成せる主體的條件を、その由つて來る過去の源流へと遡つて追跡することが問題の主題となつてゐる。かゝる立場をとれば、あたかも河の流れをその主流を遡つて遡航するのにも似て、問題は必ず *Entwederoder* をもつて提起せられねばならぬことは理の當然であらうと思ふ。複雑な言ひ方ではあるが、古い立場を「發展

史的」立場と言ふとすれば、新しい立場は「遡源史的」なそれだとも言ひ得るであらう。

大塚氏の見解の變化が實は氏の立場「視角」の轉換であることは、本書の後篇（第五から第十一までの諸論文）においても明瞭によみ取れるのであるがこゝでは省略する。ただ氏の古い立場は第五、第七の論文に、新しい立場は第九、第十の論文に最もよく現れており、兩者を對照してよむことによつて氏の立場「視角」の轉換が明瞭に浮び出て來ることを申し添えて置きたい。

天坊幸彦著

上代浪華の歴史地理的研究

吉田敬市

本書は元浪速高等學校教授であつた著者が永年間の調査研究の集積にして、大阪附近の郷土史といふべきもので四百二十七頁の大冊として昭和二十二年五月刊行せられたものである。全篇五篇より成り第一篇は上代帝都の研究として仁德天皇難波高津宮、孝德天皇の長柄豊碓宮、聖武天皇の所謂難波宮等を取りあげその舊蹟、位置等につき詳細なる論考が加へられ、長柄豊碓宮は舊來の上町丘陵説を排して現在の天蒲附近であるとし、聖武天皇の難波宮は仁德天皇の高津宮附近であり、味經宮は現在の流川北岸西中島以東の地であると論述されてゐるが、その正確なる舊位置は明かにされてゐない。